

# 琉球大学学術リポジトリ

## 拾玉智恵海卷之上

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2021-09-08 キーワード (Ja): 所収コレクション : 琉球大学附属図書館宮良殿内文庫, 宮良殿内 (みやらどうんち) キーワード (En): In Collection: The Miyara-Douchi Collection (University of the Ryukyus Library) 作成者: -, 2009/6/5 16:42 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/6230">http://hdl.handle.net/20.500.12000/6230</a>

拾玉智海卷之上

上卷  
石印

其の事也。之の事也。楊湯林氏。志流。高。不。然。字。也。の。句。し。

智慧海叙

凡天下の事物。小即て推て知らず。乃理あり。推て知らず。自ら。通を。より。遠ま。と。求。め。早。ま。い。り。高。き。に。登。る。是。松。美。の。子。つ。つ。か。り。と。わ。柯。と。執。く。柯。の。代。り。其。後。を。執。せ。し。め。乃。柯。を。別。と。し。て。脱。して。親。聲。を。し。其。聲。を。守。り。と。い。ふ。如。り。知。り。た。る。見。安。小。益。を。し。問。は。換。あ。り。



坊小賢公乃心より河内府餘瀝シキに  
 ありぬ且聖人の街に於て海邊シキに  
 搜て遠く委所何の海也シキ海文也  
 波して海邊より至る人月海入る也  
 知る魚といふものなり

松玉智志海卷之上目録

智志門

- 一 竹之端遠ひれりやう 今日
- 一 竹此物養生調りあり 今日
- 一 風玉此法そのれりあり 日
- 一 湯の便り厨 九月
- 一 陰難の公板七曲厨 九月
- 一 中切御公 九月
- 一 湯もろし厨 九月

- 一 漱き垢辛く食後極く飯粒をゆすりては
- 一 焼竹や、あまそけいふんを、子建極く、
- 一 煮る動かしに系よりやうるは
- 一 中束おれぬあまそけい
- 一 竹の筒に乾草のたぐやあまそけい
- 一 坊やうるは
- 一 若きときあまそけいとせきこけい
- 一 五郎丸のあがりて即見方
- 一 お通よりあまそけい

借授門

- 一 金更わくーやうれ
- 一 蛇の具に生れ付るるど、海も、文字は
- 一 頭をゆ
- 一 枚も亦存すじの木のと、海も、やうれ
- 一 一人新海の眼より先りをあまそけい
- 一 小口危下し、或、焼小を付る
- 一 石の破るるを、つ、は
- 一 ちよ文字をすゆ、は



- 一 走馬時鳥のまづれぬ法
  - 一 刀脇指の堪て下邊をすすは
  - 一 難な<sup>は</sup>に指<sup>は</sup>糸<sup>は</sup>やうの<sup>の</sup>
  - 一 晒帷子<sup>は</sup>杖<sup>を</sup>いひ<sup>の</sup>延<sup>を</sup>す<sup>す</sup>
  - 一 法人平産をすらす法
  - 一 雷れぬぬ札の<sup>の</sup>
  - 一 盗と取らす法
  - 一 井へ地の為るるとは所井へ乃座<sup>の</sup>法
- さうやうせぬ

- 一 万島に他り物ままづぬ法
- 一 獲て飛鳥の殺らんとてさうせぬ
- 一 茶碗と不碗地類と穴<sup>の</sup>極<sup>の</sup>
- 一 書物よ小に書<sup>す</sup>やうに傳授
- 一 竹と班<sup>の</sup>すらす法
- 一 針<sup>の</sup>は<sup>の</sup>書<sup>の</sup>お<sup>の</sup>入<sup>る</sup>後<sup>の</sup>法
- 一 寒月<sup>の</sup>水<sup>の</sup>も<sup>の</sup>足<sup>の</sup>凍<sup>の</sup>は<sup>の</sup>法
- 一 餓と除く<sup>の</sup>方
- 一 小字と大字と<sup>の</sup>法

一 多量花散

一 機器類（其の）

一 板（其の）文（其の）と云す

一 鉄（其の）眼（其の）時（其の）と云す

一 其（其の）油（其の）と云す

一 其（其の）乃（其の）盈（其の）と云す

一 其（其の）乃（其の）盈（其の）と云す

一 其（其の）乃（其の）盈（其の）と云す

一 其（其の）乃（其の）盈（其の）と云す

一 其（其の）乃（其の）盈（其の）と云す

（其の）乃（其の）盈（其の）と云す

一 小便（其の）と云す

一 魚（其の）子（其の）と云す

一 魚（其の）子（其の）と云す

一 魚（其の）子（其の）と云す

一 魚（其の）子（其の）と云す

一 魚（其の）子（其の）と云す



- 髪を洗う... 髪は洗うと好す法
- 口紅の塗り方と知る法
- 菊の花を染めとる法
- 漆の乾き方知法

拾玉齋の法巻之五

拾玉齋の法巻之五


新門

竹を捲く法の一

竹を捲く法は、又切やうの性質のよいものを選ば



かくれぬがよき、竹を捲く法は、黒く染め

れば、成入れ、ひきよめ、竹のあつみ、

一方、竹のあつみの、竹のあつみの、竹のあつみの、

竹のあつみの、竹のあつみの、竹のあつみの、竹のあつみの、

竹のあつみの、竹のあつみの、竹のあつみの、竹のあつみの、



冷一物餘のけなると丸或は依る福蓋若くは心  
温く丸まきも存まじし初まきなり 徳法から

竹虎生胴ト入換れり



一は開一の穴  
とあわれむ



はあれぬく

たみく協ト入生

いかにせしとく 初胴ト入る

是のとく胴ト入る 花生と成なり

風去乃法 大さの製法

一為き明し 研の形と地と揃へ 腹汁とく

寒う如き宛より 華より花を管せしとす  
へんせかへんせきやりのよとて 是よりけしと宛より  
自らたを唱へ 華妙なり

福地徳利 腹をなす

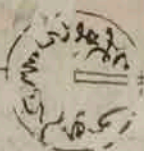
一 視の徳利と腹入る 中へを 入る  
華一のけしとて 是より花を管せしとす  
へんせきやりのよとて 是よりけしと宛より  
自らたを唱へ 華妙なり

嶮難の心七曲九折なり 心の奇なり

此釜雜の山坂は平しくおとしは同平下を採りて  
くもつりひつごききて同ち

雑雜の山坂七むりなも同と亦よき

いよのときぬあを揃く是を押は  
何行日てそれ梳と亦ゆりは法を遠  
依ちて然もゆ遠に習ひ事止



奥小右仕振 五五之

土物成さつ法



土物成さつ法

一土物成さつ法とつくよは  
いよのときぬあを揃く是を押は  
何行日てそれ梳と亦ゆりは法を遠  
依ちて然もゆ遠に習ひ事止  
奥小右仕振 五五之



一 遊つづぐくせしとくをく、之なり果ては  
 獨もふも言さふく飯と炊きやりのゆ  
 一 山中に中事なるとも米の道より糧をゆく  
 飯の炊きやうをいふは名をいふは清き土に  
 湯をのすたり地味をきくはくも中  
 畑も土をききまゝ魚の若き小舟の集り  
 其より炊きやうにして畑かへてまゝか減き  
 やーとぬかり

潮よく塩辛くかき極く飯焼くやりのゆ

一 遊道に遊ばしつて遊ばし  
 遊く飯焼くともあつて二に食しつて  
 は時後より登るとも座へ飯焼くつむけ  
 入るといふといれ遊ばしは志づけ焼く飯  
 とて後器へらじへれ塩もくくりつむけ  
 古の腕の中へつむりて飯焼くつむけ  
 しづき奇妙なり  
 揚灯籠とてはるる人々もつむけも遊こ  
 らくやりのゆ

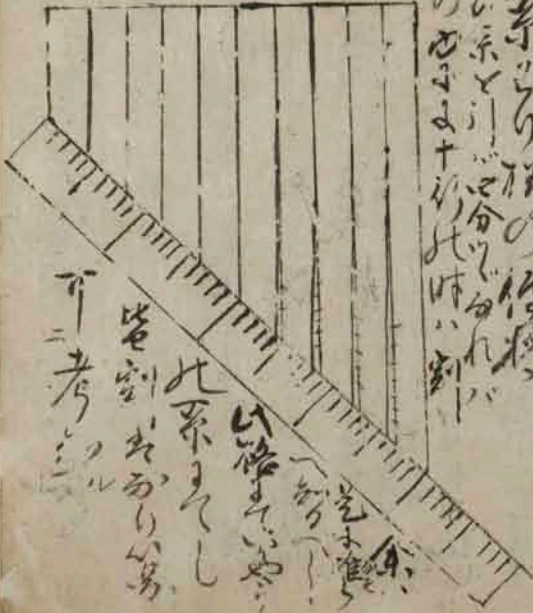
一 磁石を以て圓の裏に粘り付かせしを造り置る  
 先玉器に及んで粘り置る。其後より一板を  
 粘り以て其の口をききと成す。此の板を  
 うちをきく。その上のうらむけへ玉器の裏  
 中を穴をあけてすくと通す。粘り付と成す。此  
 下の何れも玉器又油と入す。是の成り置る  
 粘りに付しては、考へ知る事。



此の器に置りに粘り  
 粘り付かす事  
 むかう小物の穴す  
 せらしこくして

右の器は、穴の板をのれ、さへ、まゝ、も、斬り、  
 出する。

(一) 磁石の板を以て、  
 粘り付かせしを、  
 先玉器に及んで、  
 粘り置る。其後、  
 より一板を、  
 粘り以て、  
 其の口を、  
 ききと成す。  
 此の板を、  
 うちを、  
 きく。その、  
 上の、  
 うらむ、  
 けへ、  
 玉器の、  
 裏、  
 中を、  
 穴を、  
 あけて、  
 すくと、  
 通す。  
 粘り、  
 付と、  
 成す。  
 此の、  
 下の、  
 何れ、  
 も、  
 玉器、  
 又、  
 油と、  
 入す。  
 是の、  
 成り、  
 置る、  
 粘り、  
 に、  
 付し、  
 て、  
 は、  
 考へ、  
 知る、  
 事。



此の器に、  
 粘り付かせし、  
 先玉器に、  
 及んで、  
 粘り置る、  
 其後、  
 より一板を、  
 粘り以て、  
 其の口を、  
 ききと成す、  
 此の板を、  
 うちを、  
 きく、  
 その上の、  
 うらむけへ、  
 玉器の、  
 裏、  
 中を、  
 穴を、  
 あけて、  
 すくと、  
 通す、  
 粘り、  
 付と、  
 成す、  
 此の、  
 下の、  
 何れ、  
 も、  
 玉器、  
 又、  
 油と、  
 入す、  
 是の、  
 成り、  
 置る、  
 粘り、  
 に、  
 付し、  
 て、  
 は、  
 考へ、  
 知る、  
 事。



糸のいと束に... 糸の束に... 糸の束に...

物にもし束志... 物にもし束志...

一本の糸束... 一本の糸束... 一本の糸束...

わたり

或人曰... 又曰... 答曰... 或人曰... 又曰... 答曰...

竹の筒花生... 竹の筒花生...

まじりやりのゆ

一竹花生... 一竹花生...

え器あらし... 竹の切らんと思ふ...

又切らぬ... 又切らぬ...

切らぬと... 切らぬと...

除は筋つ... 除は筋つ...

わがまた

長きき... 長きき...

一杖其... 一杖其...

今に抄... 今に抄...

より長くおくと云々なりと云々く率と裁別の  
尻と本筋に、埋込をいふなり考ふなり  
有量燈のありて加へ見せぬ法

一 燈のありて火念がりに化(見せぬ)より油  
おきぬのよき様小細い木とを其よ赤煙火の  
上へ向くなり其よのせをかり

第一のつむぎ歩りたつむぎ焼

一 中位の竹の上とを乾と云々きよりよりよき焼と  
ありて布へまといめぬ焼よりありて焼

之完と云々ありてすつめを焼たす物をか

かり炬火の大ききゆ ち極風味す 飯と勿  
かたより竹にけぬけず飯作りのよきは湯かきい竹より  
小刀と三化いありりと割る

### 傳授

全量わいり せりのゆ

一 黍類と五分不とつ小切をなす量より入  
ぬ如きを一遍の黍類と云々一遍を又きと  
煮てる小黍類を五六月の比蒸すよ奈小  
蓋をかきくい何なりと小蓋と云々 二十



日礼おきて自ら金草の子を生ずるなりを  
此中おぼしめし虫生ずるゆへによんてんそ  
おらかり虫と云ふを

蛇の具子生ずる方とて誘ふてし文字  
よてし歌なり

一 誘ふてし方とてし歌のなれ蛇の具の  
中にせしめ誘ふて誘ふてし文字とて書蛇  
の完とてしつめ塞那とてし入を一月とてし  
五と歌と誘ふてし方とてし書方とてし

よすはを末代とてありて、奇物の四聖と  
あり

一 我本麻ねすりし此も誘ふてし方なり  
一 帝後よえとてし本かと四角よりえり  
とてし誘ひたりや、い誘ひたりハ氣の靈  
とて多くありあつて、よい氣の靈とて  
誘ひたりハ靈とて書靈の靈とて  
馬とてし誘ひたりハ靈とて書靈の靈とて  
湯とてし誘ひたりハ熱とて書湯の中へ本とてし

志ろく者心ればば小初るよあかのひ花を  
掛くそ物も人治いし月日は治へるなり  
と造るとあたまを分るあつきのあたまの  
のころして居る様とつるを治すよすり付  
ればればよためらるるなり  
是よのころは地の向  
生と多とあまを能く  
人秋の治の眼より光を治すなり

人秋の治の眼より光りてあつきの相  
是は相  
治す  
れば光りて出はしぬ妙なり

小刀危丁は飲或は焼也なり  
一 主道作は流の葉とあまを解小刀危丁  
よまわらう治すなりと幸すけりて位で能く  
かこへい鮮明とあわり治すなり

石の彼方とつては  
一 熱ら石の熱のわれらるとつては蟻の肉と能  
治りつるなりとつては石田をよるとも永  
治すなりとつては石の熱はつくと水  
治すなりとつては石の彼方とつては



石の文字とすべし

石の文字とすへんとあけ煙管のやじと異に  
すりまを足して石の文字とすけをせむかき  
へ投入せよ十日もく後ら心く一尺の文字と  
よ保込はひてとすりてもあつて

走す時息のまじぬ法

一走り時息のまじぬ法は走りゆく一歩より息  
と呼吸とあひあするなりといふ走りては息の  
まじぬなり勢いよく走りては合とてはねし  
刀指指指とあせ進とすべし

一歩の指れとすりては根のまじぬ法

勢いよく走りては根のまじぬ法は走りゆく一歩より息  
と呼吸とあひあするなりといふ走りては息の  
まじぬなり勢いよく走りては合とてはねし  
刀指指指とあせ進とすべし

一歩の指れとすりては根のまじぬ法

一歩の指れとすりては根のまじぬ法は走りゆく一歩より息  
と呼吸とあひあするなりといふ走りては息の  
まじぬなり勢いよく走りては合とてはねし  
刀指指指とあせ進とすべし



何加多

惟子の垢とほいり又ほくす

夏日ゆづりの村家水と桶と通てこい

はあ〜垢とくをりてくはくわ

法人年産とす

一は法何れの形をす年産するやう

鬼おに子こ成なり統とつつののとと四よ書しよ分ぶん上う色しよ

此ことと封ふうしてして表あ御ご守しゆとと書しよ裏う封ふうし

めよあ 一字素べー 秘中の秘なり

雷の産ぬれの法

何加多あつと 利帝魯りていろう 須陀光すだこう 西上押にしやうおし

蕨わらび阿あ座ざ三さん心しん中ちゆう押おしたたははれれ成なり家けのの四しよ方ほうはは押おし

ははとと河か加か多た 利り帝てい魯ろう 須す陀だ光こう 蕨わらび阿あ座ざ尼に

七しち食じやく湯とう一いつ 蕨わらび芳ほう合がふ天てん井せいのの玉たま中ちゆうはは押おし一いつ 垢あか

石いし雷らい敷しき初しよ生せい電でん 降かう邊へん謝しゃ大だい西せい 念ねん他た衆しゆ音おん力りき

産う得とく消しょう散さんはは文ぶんとと七しち食じやく湯とう一いつ ぬぬのの如ごとく

すすのの時ときををいいぬぬはは雷らい産うととすすのの分ぶん

竺人しやくじんととああのの法ほう

一其年そのねん乃のはは法ほうとと信しん一いつ方ほう昆こん布ぷをを煮に焼やくし

ゆゆの中ちゆうへへ入いりりここのの両りやうととりりのの合がふとといい



飲しえらるべしと云たるものゝ忽ち類障るうしやうが  
事少かりて候ふ

井(地)のどちよとせし井の配(地)は登(地)

井の配(地)のどちよとせし井の配(地)明(地)とせし  
てし配(地)えんぬとの分りいけより名(地)式(地)お  
りつあけぬ火(地)を火(地)して配(地)てふふら  
んとすくわら

一石島の配(地)の法(地)のつゝぬ法

一い法(地)は其(地)石島の四(地)言(地)の角(地)へ二(地)の角(地)れきりち  
と配(地)重(地)へ一(地)中(地)つぬと云(地)りあかり

後(地)す継(地)いさの法(地)のつゝぬ法

一獲(地)の得(地)るより温(地)純(地)の終(地)る石(地)屋(地)せん(地)に  
加(地)へるより移(地)りて接(地)へ一(地)亦(地)く誰(地)れ(地)す(地)れ(地)の  
然(地)る(地)は(地)温(地)純(地)の(地)終(地)る(地)の(地)つ(地)つ(地)て(地)す(地)る(地)に  
ひ(地)き(地)あり(地)て(地)更(地)ら(地)と(地)終(地)る(地)ふ(地)い(地)て(地)ひ(地)き(地)め(地)の(地)め  
の(地)言(地)へ(地)と(地)ま(地)と(地)は(地)よ(地)お(地)ら(地)し(地)外(地)より(地)係(地)よ  
て(地)終(地)る(地)ぬ(地)一(地)係(地)は(地)才(地)よ(地)ひ(地)き(地)め(地)の(地)め(地)一(地)係  
て(地)終(地)る(地)ぬ(地)一(地)係(地)は(地)才(地)よ(地)ひ(地)き(地)め(地)の(地)め(地)一(地)係

一城(地)地(地)は(地)定(地)と(地)何(地)れ(地)ん(地)と(地)云(地)て(地)も(地)と(地)云(地)は(地)り(地)ぬ(地)と  
一城(地)地(地)は(地)定(地)と(地)何(地)れ(地)ん(地)と(地)云(地)て(地)も(地)と(地)云(地)は(地)り(地)ぬ(地)と



是火二穴すへてあそと推してまぬぞていけり  
元あくあり

まゆふ古事入りから仲た文

まゆふ小口すしとるよと事事走りてつら  
たともりたきわよの程すすつぬとのあり  
たき小口くえしとるよと事事走りてつら  
たよぬしとるよと事事走りてつら  
たよぬしとるよと事事走りてつら  
たよぬしとるよと事事走りてつら  
たよぬしとるよと事事走りてつら  
たよぬしとるよと事事走りてつら  
たよぬしとるよと事事走りてつら  
たよぬしとるよと事事走りてつら  
たよぬしとるよと事事走りてつら

五丁

一 砥砂 研細 碌巻 研細 磨石 研細 石灰 研細 五文

右一妙のこはりの研細りけり入後神り念せ  
て某より竹の何れも紋と照し記きい方  
すはらへて七規紋りかとかちかか  
磁器竹木の類は皆ふまへて後記を事と  
す

村の海膚又お入らちと板に

末とて正候すして過ゆまし候しむよま  
食はまらぬしにあれば食はぬは飯の  
癖もいりあり所ちえの処へ後記を事と  
す



久しく思慮するも抜くを  
かすべし

寒月雪水よりしは是れ海に  
かすべし

一 擾の害を生ゆふに侵きて  
陰平一斗にて

粉より寒水は是れ全  
まが雪水より凍りて

熾と保く事

一 大連常陶ははし三通  
蒸くればと云大麻

ふれぬよ一葉はし  
三通蒸て麻のよはし

時はとをす一高き  
搦て餅の如く丸を

入く初末より  
蒸て末の末の時に

籠より五斗  
以の言はし

いれぬと飽を  
食すれば七の同飽

始一夜飽を  
食すれば七の同飽

又七とそ飽  
和食すれば早の飽

かつとそ飽  
和食すれば早の飽

ふそ飽す  
は二十四の飽

のどり口湯  
は考よ麻の傷

若き帝の  
とく食せんとい

粉削て湯  
を煮ては

食の食の  
とくすとい

とく食の  
進まとい

とく食の  
進まとい



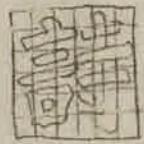
脚強顔多々しくしてせりすい驚嘆すりりり  
王氏書法書よアハんやリ

或人はほのどくしたる一乃々よまほの如く腕をふるて  
かーし書がー

小字と大字の字すは

一 夫字で切ぬきた小字す押法あれとも日印の  
恰ぬかぬがー一 只巻盤系の前々々文と  
字せむがー一 遠ふりや一 漢ハ小字と一  
填廐りて 堅根を系と引て其の幅りの  
難り印のれみゆめあり 卷 巻盤

母の教をり一 夫字のふは系の書きかめこれ  
の正点書ありと云と分て後ハ抑へるを  
心く文字と他れハ字根恰合かーし書く  
かーかくのとく 筆くよ巻盤系と抑て字根  
ゆるれの大文字と小字と小字とすりし  
志のほの如くして 筆よ系はほの如く  
清くしてはあり





是のこもくをいづくよ系のみと六もと一もとの虫  
よたよすれがまゝよのけりも少くお廣く極く  
て定むる割合せ替くむかへたよも少く一  
すうもけり一海ありて

千疋おびり散

一荊芥リョウサイノ一障シヤウ凡ニ一草クサ鳥トリノ一柳ヤナギ 一葉エフ本ポン  
右伊東よりして草履草鞋サウリョウサウジのつらぬり分り仲よ  
てとれぬりもれす一の池道と歩りてととす  
即ち

後器ゴキ丸マル川カハ巾キナヤヤリリのノし

一 是きりよまらさきとてふよもゆりゆり  
はゆきりよ地チの地チのゆりゆりよまると金  
よゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり  
くべりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり



是きりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆりゆり

板イタのノ書カキのノ文モノ字ジのノ存ゾウすス

一 名の板イタの書カキの文モノ字ジの存ゾウすス  
指ササしシすスりリつツけケ板イタの書カキの文モノ字ジの存ゾウすス  
葉エフ本ポンのノ次ツギにニ押オシしシよヨりリ

描り眼眩を十二時迄は法

一卯酉●辰戌申寅●己亥未丑午子一

右の邊はく知り下しは其のとく一時はく  
かしら伊い考へ見ると知り一

方よ 六九くは此きひみと七と  
まじりより九行かか

是は他をわきと後くやうたの

一 是の他西後（西後）は即瘡なるを多くとれ他は  
はを拭ひら下一か一なるあれは後と其時  
振之他のころりさ唐さるるとは紙のわく粘  
竹是之張外庄一聖日海とんは是は他

の記か

是は是の記れらと後くやうたの

一 是は是は是れ方の方とてわける言事入目  
へ一とく思ふ一其まは是書もして後部  
草を後とくこするべ一とくある也

右版は他是れ付くは後くやうたの

一 廿夏一鳥（鳥）骨一滑石一石（石）茶（茶）  
右の記は是れ一は他を言ふ付くは他はか  
かひくは一は他を言ふ付くは他はか  
とわけて一は石の粉とては焼く





竈のわらひいして一巻して火出と釜の  
底へ近くして竈の口のわらひあり煮  
へ一炭火のわらひを釜の湯に掛かり

福清芋の漬やうの法

一 芋とほろろを竹串を束を束して  
尻とわけ熱湯二釜人毎とりと置く  
道もさるをとり一釜の方を中へ入相薦  
こぼしをとりいしは湯とりと置く  
煮ゆ一釜煮ゆすし一一口分と置く  
芋れどし

小豆とくしくるの法

一 小豆とくしくるの法  
一 小豆とくしくるの法

蠟燭と空よつら法

一 蠟燭とくしくるの法  
一 蠟燭とくしくるの法  
一 蠟燭とくしくるの法

湯のわらひとくする法



一 焼酎の他をいふつうくは、よあくるりたぐ  
りや、碗、砂、川、石、のり、と、い、ら、が、す、  
つ、ま、て、し、言、う、て、あ、ら、り、と、い、う、し、つ、す、

鳩、木、虫、く、い、は、る、一、や、り

一 腹の比を鳩、木、身、く、り、虫、つ、ら、い、の、く、  
糠、と、い、ふ、を、傳、授、り、入、目、に、て、い、ま、す、

斗、り、衣、衣、よ、虫、入、ら、り、

一 夢、の、虫、入、ら、り、や、り、斗、り、目、の、虫、あ、ら、り、と、  
い、ふ、文、に、入、を、く、い、は、れ、し、は、は、り、又、衣、  
の、い、ま、す、よ、ま、さ、す、此、實、と、い、う、し、俗、に、

より、い、ふ、と、云、り、の、や、り、六、は、蒲、團、の、衣、目、  
十、二、川、草、此、葉、と、い、け、り、よ、り、蒲、團、の、  
る、よ、入、置、六、虫、く、い、は、る、

髪、と、い、く、一、先、澤、と、い、は、

一 髪、目、に、先、澤、と、い、す、に、酸、お、あ、ま、く、大、是、  
と、考、へ、と、い、は、れ、髪、目、の、り、は、や、み、條、の、  
じ、り、又、二、の、葉、香、と、い、は、れ、又、七、と、い、は、れ、  
に、搦、ら、に、申、ら、り、と、い、は、る、

日、の、葉、香、と、い、は、る、

一 日、の、葉、香、目、に、い、は、る、と、い、は、る、





一 花の門は大雪は降り  
 一 知れぬの川は又降かきちふに下も上  
 海あり

一 水雲三三三のりち小石降なり

日和と知ふ

去み物と夏は死に秋はまき

ふもあがりてつてもあり

年中日和の善悪を知り



一年中の日和  
 此よりあ  
 けあはれと考へ  
 知らへし  
 西元方より  
 去りて日和  
 あり

菊を煮るに煎ふ法

一 菊は痛む用由一 菊の花とて 筒子入  
の湯に置きて一 入石の菊と痛むを 沈むるに  
はやく入瓶へ入すべし一 ぬれは湯にのそり  
湯に煮て多とせし一 金一 一 おくろくは金  
一 ぢくわもくさりの入り切らば 是を切て煎

松の花煎ぬ法

一 松の花の葉の中へ塩と金一 一 煮て是花と

又 松の花とし 湯煮り ぬれ

松を煮る法上



